

尿検査その3 尿化学検査

ペットも高齢化時代になってきています。そのため腎臓病が増加しています。

- ・腎臓病の進行は腎機能が50%になったときでも無症状なので気付きません。
- ・腎機能が33%のとき、血液検査（BUN、Cre）では異常値は出てきません。尿検査は腎機能が50%以下で異常が感知可能です。飲水量と尿量は増加します。
- ・腎機能25%になって、ようやく血液検査でも異常値が出てきます。このときは尿毒症の症状が重くなっています。

*尿毒症とは腎不全などによって腎臓の機能が低下し、本来は体の外へ排出される老廃物が体内にたまり、その結果、全身の臓器に悪影響を与える病気です。

尿毒症は早急に治療をしないと命に関わる危険があります。

尿蛋白/尿クレアチン比

犬、猫でも24時間の尿蛋白排泄量と尿蛋白/尿クレアチン比（UPC）に高い相関関係があることがわかり、UPCを24時間の尿蛋白排泄量の代わりに測定することによって、犬、猫の慢性腎疾患においても蛋白尿の測定意義が明らかになってきています。尿蛋白クレアチン比は腎臓機能を示す値です。

犬と猫の糸球体腎炎における尿蛋白/クレアチン比は、糸球体前性と糸球体後性の蛋白尿を起こす疾患が除外されたならば、診断に有用です。その比が1以上の場合には、蛋白喪失性腎症が示唆されています。

尿の性状は食餌・飲水量、環境などで大きく変動しますが、この”比率”は変動が少なく、安定して信

頼性のある評価が可能となります。

腎機能が落ちると、尿の排泄能力が落ち（尿クレアチニン濃度減少）、再吸収の障害や漏出も起こります（尿蛋白濃度上昇）。そのため腎機能が落ちると尿蛋白/クレアチニン比が上昇します。

血液検査でBUNや血中クレアチニンが高かったとしても、尿蛋白/クレアチニン比が正常値であれば、腎臓自体には問題はないということもわかります（腎外性腎不全）。

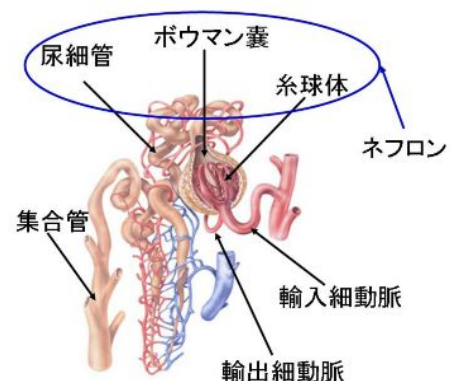
腎性蛋白尿は主に糸球体毛細管壁に障害が及んだ結果として生じます。尿中蛋白/クレアチニン比は腎臓病変の重症度を評価し、治療に対する反応や病気の進行を評価する際の目安になります。

血球成分が混入した尿、細菌感染による炎症により高値になる場合があります。

血尿サンプルは、+の誤差を与えてしまうため、穿刺等による血液の混入に注意しなければなりません。

また、このような検査の性質（血液混入、細菌感染による炎症による影響）を利用して、腎機能に異常がなければ、尿路感染症のモニターとして検討されている例もあります。

検査代金は400円と非常に廉価ですが、臨床的な価値は非常に有用な検査です。



◆◆◆トピックス◆◆◆

【犬猫の展示は夜8時まで】

違反業者には罰金も 「猫カフェ」は例外

環境省は6月1日、ペットショップなどの動物取扱業者が犬と猫を展示できる時間を午前8時から午後8時までとし、それ以降の夜間展示を禁じる動物愛護管理法の改正省令を施行した。動物のストレスを軽減するための措置です。

お茶を飲みながら猫と触れ合える「猫カフェ」については、1歳以上の猫で施設内を自由に移動できる状態であれば、2年間の経過措置として午後10時まで認められています。

繁華街で深夜営業する店に対し、動物愛護団体などからの批判が高まっていた。環境省が2010年に設置した専門家委員会の中で、規制する方針が決まりました。

違反した場合、自治体は改善勧告や命令を出せるほか、従わない業者には30万円以下の罰金を科することができます。

同時に施行された政令では、犬や猫を取引するオークション業者や、高齢化した動物を譲り受けて飼育する「老犬・老猫ホーム」などの施設に、都道府県への登録を義務付けました。



一般社団法人 ペットフード協会の 平成23年度 全国犬・猫飼育実態調査 結果

犬・猫 推計飼育頭数全国合計は、

ほぼ横ばいの21,542千頭

(犬：11,936千頭、猫：9,606千頭)

*2011年3月11日に発生した東日本大震災による推計被災頭数(被災地における生存した犬猫、死亡した犬猫、行方不明の犬猫を含む)は以下の通りです。

犬：約6,500頭

猫：約6,400頭

犬猫合計：約12,900頭

避難者のうち、犬猫を飼育できなくなった人の割合は不明です。

平成23年度 犬猫の年代別現在飼育状況

50才代での犬及び猫の飼育率が最も多く、次いで60才代で飼育率が高いことから、高齢層でのペットのニーズの強さが見えます。また30才代での犬及び猫の飼育率が少ない結果となっています。これは、子育ての時期等の様々な影響が考えられます。

	犬	猫
全年代	17.7%	10.3%
20代	16.3%	8.7%
30代	13.8%	8.5%
40代	17.1%	10.2%
50代	22.7%	12.0%
60代	18.6%	11.8%

平成23年度 犬・猫平均寿命

犬全体の平均寿命は13.9歳、

猫全体の平均寿命は14.4歳

犬は、超小型犬、小型犬の寿命が長くまた、猫の場合、「家の外に出ない」猫の平均寿命は15.8歳、「家の外に出る」猫の平均寿命は12.3歳と寿命に大きな差あることが分かりました。猫の場合、「家の外には出さない」飼い主の方のほうが、家族の一員として猫とより長く暮らすことができると言えます。